

佐賀県研究成果情報(作成 2021 年 2 月)

[情報名] 県内の半促成栽培キュウリでのタバコカスミカメおよびスワルスキーカブリダニの併用による害虫密度抑制効果の向上

[要約] 半促成栽培キュウリにおいて、天敵昆虫のタバコカスミカメとスワルスキーカブリダニを併用すると、スワルスキーカブリダニのみを利用した場合と比較して、アザミウマ類とコナジラミ類に高い密度抑制効果を示す。

[キーワード] キュウリ、スワルスキーカブリダニ、タバコカスミカメ、土着天敵

[担当] 佐賀県農業試験研究センター・環境農業部・病害虫・有機農業研究担当

[連絡先] 0952-45-8808・nougyoushikensenta@pref.saga.lg.jp

[分類] 普及

[部会名] 野菜

[専門] 病害虫

[背景・ねらい]

促成栽培キュウリにおいて、タバコカスミカメ(*Nesidiocoris tenuis*(Reuter))を導入する技術マニュアルが農研機構より公開されている(2015)。そこで上記のマニュアルを参考に、佐賀県内で広く栽培されている半促成栽培キュウリにおいて、天敵農薬「スワルスキーカブリダニ(*Amblyseius swirskii*)」(以下、スワル)と土着天敵「タバコカスミカメ」(以下、カスミカメ)を組み合わせた防除体系の、アザミウマ類およびコナジラミ類への防除効果を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

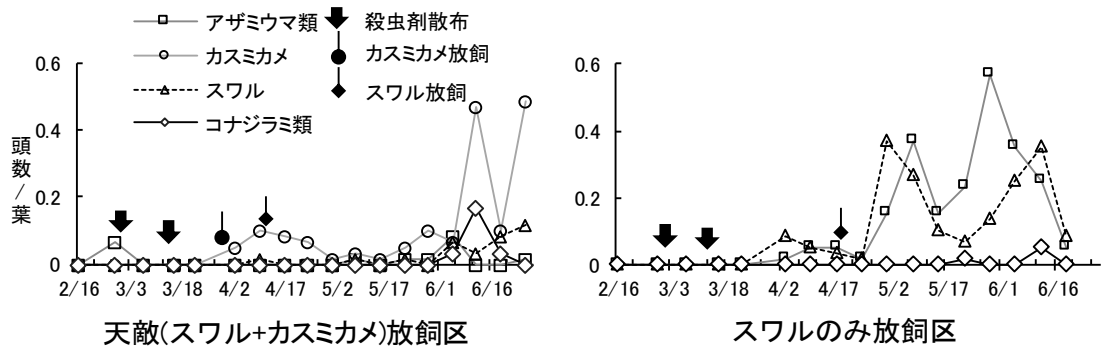
1. スワルとカスミカメの併用は、スワルのみの場合に比べ、アザミウマ類の密度を長期間抑制する(図1)。
2. スワルとカスミカメの併用により、アザミウマ類とコナジラミ類の密度が抑制できるため、薬剤防除区と比べて殺虫剤散布回数を削減することができる(図2)。

[成果の活用面・留意点]

1. カスミカメの導入は3月までに約1000頭/10aを目安に放飼し、定着が確認されなかった場合は4月以降に追加放飼を行う。
2. カスミカメの過剰増殖(目安はキュウリ葉当1頭以上)によりキュウリ果実への被害が発生した場合は、アカリタッチ乳剤の散布を行い、密度低減を図ること(図3)。
3. カスミカメの維持・増殖にはクレオメなどの天敵温存植物を用い、春から秋季までは露地、冬季は遊休ハウスなどを地域の実情に応じて活用する。
4. 定植時期が8月~9月頃になる抑制栽培等の作型では、天敵を導入する前の生育初期からアザミウマ類やコナジラミ類が寄生し、虫媒性のウイルス病が発生するリスクが高まるため、注意する。
5. これら2種類の天敵の併用に関しては、農研機構「施設キュウリとトマトにおけるIPMのためのタバコカスミカメ利用技術マニュアル(2015年版)」を参考にする。

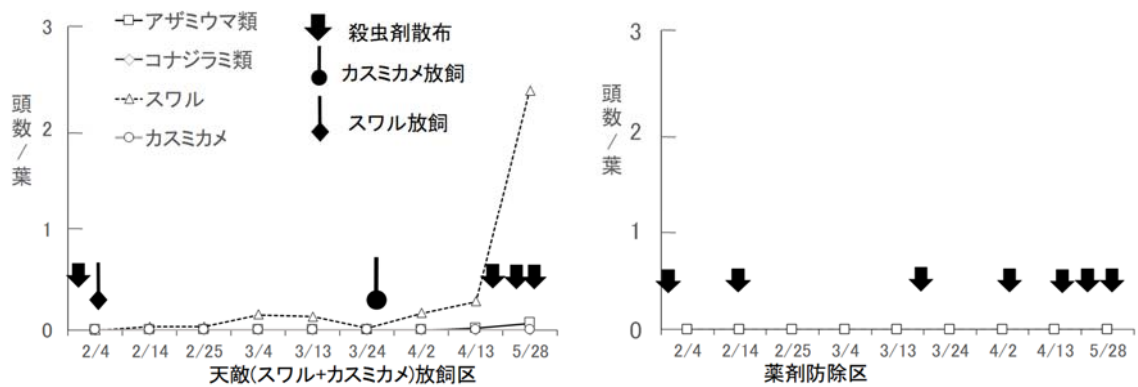
http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/060741.htm

[具体的なデータ]



- 1)カスミカメは30cm程度切断したクレオメの花茎を圃場内に配置し、2000頭/10aの割合で放飼した。
- 2)天敵温存植物として、各畝の両端にクレオメを1株ずつ定植した。

図 1 半促成栽培キュウリにおける天敵類と害虫類の発生推移(2018)



- 1)カスミカメは定着したクレオメを約40株定植することにより放飼を行った。
- 2)天敵(スワル+カスミカメ)放飼区の殺虫剤散布回数は4回、薬剤防除区での殺虫剤散布回数は7回であった。

図 2 半促成栽培キュウリにおける天敵類と害虫類の発生推移(2019)



図 3 タバコカスミカメによる果実のコルク状の吸汁痕(2018年10月撮影)(品種「ゆうみ」)

[その他]

研究課題名：土着天敵「タバコカスミカメ」等を利用した野菜類害虫に対する防除技術の確立

予算区分：国庫

研究期間：2016～2019年度

研究担当者：古川あずさ、原本すみれ、成富毅誌、衛藤友紀